

1. 科目名 (単位数)	社会病理学特論 (2 単位)	3. 科目番号	PSMP5263
2. 授業担当教員	阿部 又一郎		
4. 授業形態	講義およびディスカッション	5. 開講学期	秋期
6. 履修条件・ 他科目との関係	1年次以上	履修形態 (通信教育)	
7. 講義概要	臨床心理士、精神保健福祉士および他の援助専門職にとって、社会病理学という問題領域は、すぐれてアクチュアルな意義をもつ。「こころのケア」は個人に先立つ社会への眼差しを欠いては、けっして豊かな拡がりを獲得できない。21 世紀の日本を舞台に、「マクロ社会の病理」「ミクロ社会の病理」を具体的にとりあげていく。まず、古典的社会学理論の形成期 19 世紀末フランスのデュルケムを読み、それを軸に欧州の各々の理論を検討する。そして、アメリカでの社会学の発展を一瞥した後、ミシェル・フーコーの生 - 権力論を手懸りに、全体のトーンを整え、現代日本の社会病理現象を捉えなおしてみる。構築主義 (社会構成主義) という最新の話題にもふれつつ、可能な限りコンテンポラリーな実質を与える。		
8. 学習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会病理学の歴史的発展について、おおまかな見取り図を描くことができる。 2. フーコー派言説分析の手法を習得し、事例の分析に使用することができる。 3. 日本の自殺者数の増加の問題について、社会病理学的に考察する。 4. 人口減少、高齢化と少子化、それらへの対策について、具体的に論述することができる。 5. 過密と過疎の社会病理について、それぞれの生活障害を記述することができる。 6. 移民に関する社会病理を理解し、多文化精神医学の観点から考察することができる。 7. 家族の病理と集団の病理について、両者を関連させながら論述することができる。 8. 子供の不適応、虐待の問題を家族、いじめ、貧困などの問題と関連して考察することができる。 9. 情報化社会の「病理現象」を列挙し、具体的に説明することができる。 		
9. アサイメント (宿題) 及びレポート課題	シラバス「14学習の展開及び内容」の各テーマを参照。		
10. 教科書・参考書 ・教材	<p>【教科書】 セルジュ・ポーガム編著 (阿部又一郎ほか訳) 『100 語ではじめる社会学』文庫クセジュ、白水社、2019 年</p> <p>【参考文献】 社会病理学講座第 1 巻、松下武志ほか編『社会病理学の基礎理論』学文社、2004 年 社会病理学講座第 2 巻、井上眞理子ほか編『欲望社会—マクロ社会の病理』学文社、2004 年 社会病理学講座第 3 巻、高原正興ほか編『病める関係性—ミクロ社会の病理』学文社、2004 年 社会病理学講座第 4 巻、畠中宗一ほか編『社会病理学と臨床社会学—臨床と社会学的研究のブリッジング』学文社、2004 年 星野周弘著『社会病理学概論』学文社、1999 年 朝田佳尚、田中智仁ら編 (日本社会病理学会監修) 『社会病理学の足跡と再構成』、学文社、2019 年 夏刈康男著『タルドとデュルケム—社会学者へのパルクール』学文社、2008 年 中倉智徳『ガブリエル・タルド—贈与とアソシアシオンの体制へ』洛北出版、2011 年 ガブリエル・タルド著 (池田祥英ほか訳) 『模倣の法則』河出書房新社、2007 年 モーリス・アルバックス著 (小関藤一郎訳) 『集合的記憶』行路社、1989 年 マヌエル・デランダ著 (篠原雅武訳) 『社会の新たな哲学—集合体、潜在性、創発』人文書院、2015 年 ジョック・ヤング著 (青木秀男ほか訳) 『排除型社会—後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版、2007 年 ウルリヒ・ベック著 (東 廉ほか訳) 『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版会、1998 年 ジョルジュ・カンギレム著 (滝沢武久訳) 『正常と病理』法政大学出版局、1987 年 エミール・デュルケム著 (内藤莞爾訳) 『デュルケム法社会学論集』恒星社厚生閣、1990 年 エミール・デュルケム著 (宮島 喬訳) 『社会学的方法の規準』岩波文庫、1895 年 ミシェル・フーコー著 (慎改康之訳) 『知の考古学』(河出文庫) 河出書房新社、2012 年 ミシェル・フーコー編 (岸田秀訳) 『ピエール・リヴィエールの犯罪—狂気と理性』河出書房新社、1986 年 ミシェル・フーコー著 (渡辺守章訳) 『性の歴史 1 知への意志』新潮社、1986 年 イアン・ハッキング著 (石原英樹ほか訳) 『偶然を飼いならぬ—統計学と第二次科学革命』木鐸社、1990 年 美馬達哉著『生を治める術としての近代医療—フーコー『監獄の誕生』を読み直す』現代書館、2015 年 大黒岳彦著『情報社会の〈哲学〉—グーグル・ビッグデータ・人口知能』勁草書房、2016 年 中河伸俊ほか編『社会構築主義のスペクトラム：パースペクティブの現在と可能性』ナカニシヤ出版、2001 年 宮島喬一編『移民の社会的統合と排除 問われるフランス的平等』初版、東京大学出版会、2009 渡邊拓也著『ドラッグの誕生：一九世紀フランスの〈犯罪・狂気・病〉』、慶應義塾大学出版会、2019 セルジュ・ティスロン、フレデリック・トルド著 (佐藤愛ほか訳) 『ヴァーチャルに治癒される人間：サイバー心理学が問う新たな主体』、誠信書房、2025 年 蓮澤優著『フーコーと精神医学：精神医学批判の哲学的射程』、2023 年 エドガー・カバナス、エヴァ・イルーズ著 (高里ひろほか訳) 『ハッピークラシー—「幸せ」願望に支配される日常』、みすず書房、2022 年 西垣通著『情報学的転回—IT 社会のゆくえ』春秋社、東京、2005 年 重田園江著『フーコーの穴—統計学と統治の現在』木鐸社、2003 年 大淵憲一著『犯罪心理学—犯罪の原因をどこに求めるのか』培風館、東京、2006 年 Schelley Tremain ed. : Foucault and the Government of Disability, the University of Michigan Press, 2005</p>		

11. 成績評価の規準と評定の方法	<p>○成績評価の規準 選んだ社会病理学に関する理論をよく理解できているが。 選んだ現代の問題に関して適切なアプローチをして論述できているか。</p> <p>○評定の方法 授業での質疑や議論への参加 50% 課題レポートでの達成レベル 50%</p>
12. 受講生へのメッセージ	<p>ポストモダンと評される現代社会では、「社会病理」の基準を定めることが困難である。それかあらぬか、社会病理学はかつての活況を失い、「臨床社会学」へと止揚されつつある。しかし、この場合の「臨床」がどういうことを意味しているのか、必ずしも明確とは言えない。精神科臨床においては、治療の理論は臨床経験から導き出され、両者はセットである。一方、現代の困難な臨床的問題、例えば「引きこもり」は 25 年来の解決できていない社会学的問題でもあり、近年は、精神医学、心理学のみならず、哲学、人類学、社会学の横断的な場で議論されている。ここで、デュルケームに倣って考えると、一つの事象を心理学的に見るだけでは本質は見えず、ひきこもりという社会的事象を、個人の行動を規定している社会の集合的な力、集合的意識から捉えなおすという別のアプローチが可能となる。</p> <p>教科書として掲げた星野の著書は、コンパクトかつロジカルに社会病理学の全貌を伝えるのに成功している。参考書として掲げた講座 1－4 巻を併読すれば、この学問の今日的位相をうかがい知ることができる。そして、不平等、社会的断絶、社会的紐帯の問題に取り組んできた、今日のフランス社会学を代表するポーガムの『100 語ではじめる社会学』を参考書として加えたい。諸概念の解説を通して社会学の基本的考え方や方法論を知ることができる。</p> <p>マクロとミクロを包括しうる研究方法として、フーコー派言説分析をとりあげる。これは言説心理学や会話分析と異なり、経験科学への応用はまだ実験段階にある。フーコーはフランスの哲学者だが、今日、アメリカのさまざまな領域で、彼をめぐって活発な議論が展開している。わけても、社会学における構築主義は、主要な養分を彼の仕事から得ているはずで、一瞥しておく価値があるだろう。</p> <p>社会病理に関するマクロ・ミクロリンクの研究基礎論として、つい最近、マヌエル・デランダ著『社会の新たな哲学—集合体、潜在性、創発』が刊行された。この著者は、フーコーの盟友でもあったジル・ドゥルーズの哲学を英米の分析哲学とフュージョンさせる仕事ぶりで注目されている。</p>
13. オフィスアワー	講義の前後 1 時間
14. 学習の展開及び内容【テーマ、学習の目標、学習の内容、キーワード、学習の課題、学習する上でのポイント等】	
1. テーマ	社会病理学とはなにか
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】 【参考文献】 【学習する上での留意点】	社会病理学という学問領域について、その黎明期から現代に至るまでの歴史的発展をたどってみる。 1) 「社会病理」とはなにか、その定義についてみてみると、時代とともに変化していることがわかる。 2) 社会病理学はフランスで起こったが、発展したのは 20 世紀前半のアメリカにおいてである。 3) 古典的社会病理学は、社会有機体説的なアプローチを特徴とし、多分にアナロジーにたよっていたといえる。 4) 社会病理は感受概念 (sensitizing concept) である、と考えることができるだろうか。 社会病理、感受概念、社会病理学、応用社会学、社会問題、社会問題の社会学、コント (Comte, A.)、スペンサー (Spencer, H.)、リリエンフェルト (Lilienfeld, P.v.)、デュルケーム (Durkheim, E.)、ウェーバー (Weber, M) 1) 社会病理を測定するにはどのようなやりかたがあるか、例をあげてみよう。 2) 社会病理学に独自の分析方法があるか、改めて考えてみると答えに窮する。 3) 社会問題の基本類型を思いつくまま列挙してみよう。 4) この学問を社会学の理論と方法の変遷のなかで位置づけてみよう。 社会病理学講座、第 1 巻、松木武志ほか編『社会病理学の基礎理論』、学文社、2004 年 社会有機体説を例に、社会科学におけるアナロジーの有用性とその畏について考えてみよう。
2. テーマ	デュルケーム社会学再考

	<p>【学習の目標】 フランスの社会学者デュルケムは、「社会病理学」と銘打つことは一度もなかったが、その実質を先取りしていたのみならず、この学問のその後の展開にも多大な影響をあたえた人物である。「集合的意識」という概念を中心においたデュルケムの社会学にその後の諸理論の多様なアプローチの萌芽が見られる。</p> <p>ここでは、現代的な実証科学の視点から「デュルケム社会学」について再考してみる。</p> <p>【学習の内容】 1) デュルケムの基本概念「規範」「道徳」「社会的事実」「集合意識」について仏語、英訳、邦訳を検討してみる。 2) ある意味では、デュルケムは社会学を実証科学であると同時に道徳に関する科学として成立させようとした。 3) 「規範」(norme) という概念によって、道徳を正常性と通底させることが可能になっている。 4) 規範概念は一方では統計学との関連で、他方では医学・生理学との関連で導入されている。 5) デュルケムが成し遂げたことは統計学と生理学の社会学における統合である、ともいえる。</p> <p>【キーワード】 個人レベルの犯罪と自殺、社会全体の犯罪率と自殺率、統計的規則性、大数の法則、平均概念、分散 (dispersion)、ケトレ(Quetelet, L. A. J.)、ポアソン (Poison, S. D.)、レグシス (Lexis, W.)、ベルナール (Bernard, C.)</p> <p>【学習の課題】 1) デュルケムの学問観をマックス・ウェーバーのそれと対比してみると、どのような特徴がみられるか。 2) カングレムの医学哲学を参照しながら、正常と異常について深く考えてみよう。 3) デュルケムの社会学のなかに「福祉国家」を可能にする思考の型やスタイルを見定めてみる。 4) さらに、現代社会のさまざまな変動を考えるための参照点として役立てよう。</p> <p>【参考文献】 重田園江『フーコーの穴—統計学と統治の現在』、木鐸社、2003年 エミール・デュルケム (伊藤莞爾訳) 『デュルケム社会学論集』、恒星社厚生閣、1990年 エミール・デュルケム (宮島 喬訳) 『社会学的方法の基準』、岩波文庫 イアン・ハッキング (石原英樹ほか訳) 『偶然を飼いならす—統計学と第二次科学革命』、木鐸社、1990年 ジョルジュ・カングレム (滝沢武久訳) 『正常と病理』、法政大学出版局、1987年</p> <p>【学習する上での留意点】 レグシスの分散とゴルトン—ピアソンの相関・回帰は、現代の数理統計学の基本的手法となっている。</p>
<p>3. テーマ</p>	<p>現代日本における自殺者数の増加をどう考えるか</p> <p>【学習の目標】 自殺は社会問題化や「言説」性があまり強調されない伝統的・不変的な社会病理現象であるが、1998年以降、日本では年間自殺者が3万人を超え続けており、2006年6月には自殺対策基本法が成立し、自殺総合対策大綱が改正され、自殺防止研究が増え、各自治体では独自の対策を立て、2010年以降年間自殺数は減少に転じた。</p> <p>【学習の内容】 1) デュルケムによる自殺の定義、およびその分類について学習する。 2) デュルケムによれば「自殺は個人の属している社会集団の統合の強さに反比例して増減する」という。 3) その後、「社会集団の統合」という概念は、さまざまな変数に置き換えられていく。 4) それらは都市化・産業化の進展にともなう社会移動の激化を背景にしたものである。</p> <p>【キーワード】 自己本位的自殺(egoistic suicide)、集団本位的自殺(altruistic suicide)、アノミー的自殺(anomic suicide)、宿命論的自殺(fatalistic suicide)、日本の自殺統計、第三の自殺多産期(ピーク)、高齢者の自殺、過労自殺、エイジズム</p> <p>【学習の課題】 1) 現代日本の自殺にデュルケムの4類型をあてはめてみよう。 2) 自殺をめぐる日本に独自の社会的・文化的背景について考えてみよう。 3) 自殺者の多くが、うつ病やアルコール乱用などの精神医学的問題をかかえている。 4) 死別・離別・未婚の男性の自殺率が女性に比べて非常に高いのはなぜだろうか。 5) 近年、自殺既遂例に対する「心理学的解剖」がよく話題になるが、どのようなものか一瞥しておこう。 6) 日本の自殺者数の増加の問題に対してどのような社会学的アプローチが可能であろうか。</p> <p>【参考文献】 エミール・デュルケム (宮島 喬訳) 『自殺論』中公文庫、1985年 社会病理学講座第3巻、高原正興ほか編『病める関係性—マイクロ社会の病理』学文社、2004年</p> <p>【学習する上での留意点】 援助専門職をめざす院生諸君にとって、もしクライアントに「自殺したい」と打ち明けられたらどうするか、ということは切実な問題であろう。自殺リスクの評価と具体的な介入法については、米国精神医学会の治療ガイドラインなどを参照してほしい。</p>
<p>4. テーマ</p>	<p>社会病理研究の諸理論</p> <p>【学習の目標】 社会病理学の主要理論における分析視点はさまざまであるが、総論的にはあれ、それらについて一通り理解しておくことは、これからディテールに入っていくうえで必要である。</p> <p>【学習の内容】 1) 機能主義的アプローチは、コンセンサス・モデルに立っている。 2) 社会構造論的アプローチには、コンセンサス・モデルに立つものと、コンフリクト・モデルに立つものがある。 3) 相互作用論的アプローチでは、行為者の主観的アプローチが重視される。 4) 葛藤論的アプローチは、社会を構成するさまざまな集団間には、緊張、対立、葛藤が恒常的に存在するという前提に立つ。</p> <p>【キーワード】 デュルケムのアノミー論、マートン (Merton, R. K.) のアノミー論、エリオット (Elliott, M. A.) とメリル (Merrill, F. E.) の社会解体論、オグバーン (Ogburn, W. F.) の文化遅滞論、レマート (Lemert, E. M.) の逸脱行動論、レイバリング理論、第一次的逸脱と第二次的逸脱、疎外論</p> <p>【学習の課題】 1) アノミーに関するデュルケムとマートンの違いはどのようにとらえられるか。 2) 社会解体だけでなく、集団解体、家族解体、地域解体についても学ぶ。 3) 逸脱行動が「公共的健康」の一要因とされるのは、どのような理由にもとづくのか。 4) レイバリング理論と従来の実証主義的研究との決定的な違いはどこに存するか、考えてみよう。</p> <p>【参考文献】 社会病理学講座第1巻 松下武志ほか編『社会病理学の基礎理論』、学文社、2004年</p> <p>【学習する上での留意点】 レイバリング理論は、現代社会学におけるホットな話題である「社会問題への構築主義的アプローチ」の前哨でもあった。どのような意味でそういえるのか、受講者同士で意見を出し合ってみよう。</p>
<p>5. テーマ</p>	<p>フーコー派言説分析入門</p>

<p>【学習の目標】 今日、心理学における質的研究法の一翼を担うに至った「フーコー派言説分析」(Foucauldian discourse analysis)の要諦について学ぶ。</p> <p>【学習の内容】 1) 人はいつでも、どこでも、任意に、自由な語りが許されているわけではない。 2) しかるべき時、しかるべき場所、しかるべき様態と適切さにもとづいて語らなければならない。 3) 言説分析では、語る内容以上に語る主体の社会的ポジションが重視される。 4) 一定の言説フィールドを想定し、そこでのレトリックと配置を仔細に観察し、記述していく。</p> <p>【キーワード】 言説 (discourse) : 対象と一連の主体の位置を構成する言表 (statement) のセット、主体の位置 (subject positions)、位置取り (positioning)、対抗言説 (counter-discourse)、知 (knowledge)、権力 (power)、</p> <p>【学習の課題】 1) 何ごとかが社会問題としてクレームされる際のマイクロな会話のやりとりを観察してみよう。 2) 集会でのアピールやメディア向けの声明を、パンフレットや記事の形で収集してみる。 3) 新聞・雑誌記事やテレビ・ラジオ番組の内容分析にもとづいて収集することもできる。 4) ある事柄に対する取り上げられ方がどのように変化したかを長期的なタイムスパンで確認してみる。</p> <p>【参考文献】 ミシェル・フーコー (中村雄二郎訳) 『知の考古学』、河出書房新社、1981年 ミシェル・フーコー編 (岸田 秀訳) 『ピエール・リヴィエールの犯罪—狂気と理性』、河出書房新社、1986年</p> <p>【学習する上での留意点】</p>	<p>フーコー派言説分析にもとづく経験的研究が集積されつつあるが、6. でみるように、そのポテンシャルは心理学ないし社会学的受容にはあっては回収できないものである。</p>
<p>6 . テ ー マ</p>	<p>管理社会における生—権力</p>
<p>【学習の目標】 フランスの哲学者フーコー (Foucault, M.) による「生—権力」(bio-pouvoir) と「生—政治」(bio-politique) の概念について学習し、現代社会を分析する新たな道具立てを獲得する。</p> <p>【学習の内容】 1) フーコーは、権力の戦略が「古典主義時代」にきわめて重大な転換を遂げたと考えている。 2) それ以前の権力は、臣下を「死なせる権利」にほかならなかったといえる。 3) 新しい権力は「生命に対し積極的に働きかける権力」、すなわち、「生—権力」である。 4) この権力は人口や民族などマクロ問題を重視し、「生命を経営・管理し、増大させ、増殖させようとする。</p> <p>【キーワード】 先験的—経験的二重体 (un doublet empirico-transcendental) としての「人間」、パノプティコン (一望監視装置)、規律権力、牧人=司祭型権力、臣下=主体化 (assujettissement)、生—権力、福祉国家、当事のテクノロジー、管理社会</p> <p>【学習の課題】 1) グローバリゼーション下、ある種の普遍性をもった人間管理のテクニックが問題になり始めた。 2) フーコーが批判の対象とした時代と社会は過去のものとなりつつある。 3) 時代は変わっても、新たに生まれ続ける「現在」を切り取る道具を残したといえる。 4) 福祉国家後の社会がこれからどこに向かうのか、まだはっきりしていない。</p> <p>【参考文献】 ミシェル・フーコー 『性の歴史1 知への意志』、新潮社、1986年 杉田 敦 『権力の系譜学—フーコー以後の政治理論に向けて』、岩波書店、1998年 美馬達哉著 『生を治める術としての近代医療—フーコー『監獄の誕生』を読み直す』 現代書館、2015年</p> <p>【学習する上での留意点】</p>	<p>フーコーは福祉国家に結びつくのとは別のタイプの、新しい統治形態が力をもち始めていることに気づき、英米にあらわれる「ネオリベラリズムの覇権」をすでに予知していた。精神保健福祉の理念と我々のケアへの欲求とは一見矛盾する主張として現れるが、この問題についても欧米の福祉の歴史に立ち返り考えてみたい。</p>
<p>7 . テ ー マ</p>	<p>構築主義とどう違うのか</p>
<p>【学習の目標】 構築主義と呼ばれる人文・社会科学上のパラダイムをめぐる、その系譜、展開、意義、限界について、学際的な分野にまたがって論述する。ここでの眼目は、フーコーの仕事 (構築主義に対する) の独自性要求である。</p> <p>【学習の内容】 1) constructionism が「構築主義」と訳されるようになった経緯について知る。 2) 「社会的に構築 (構成) される」とはどういうことか、その含意を正しく理解する。 3) 本質主義および客観主義に対立するこの構想のもつアドヴァンテージを把握する。 4) 「存在論的ゲリマンダリング (OG)」についての批判をどうかわすか、考えてみる。</p> <p>【キーワード】 認知科学における構成主義 (constructivism) との区別、存在論的ゲリマンダリング (ontological Gerrymandering)、社会問題、クレーム申し立て、スペクター (Spector, M.) とキツセ (Kitsusse, J.L.) のラベリング論、物語性への注目、歴史叙述の出発点</p> <p>【学習の課題】 1) 言説分析と構築主義との遭遇は、生産的であったと見ることもできる。 2) 女性、精神障害者、身体障害者、マイノリティを積極的に取り上げることも重なる。 3) フーコーの理論的営為は、しかし、つねに行為であり実践であったといえる。 4) 彼にとって批判とは、別様の経験回路を創発する行為であったのである。</p> <p>【参考文献】 中河伸俊、土井隆義、北澤 毅編 『社会構築主義のスペクトラム』、ナカニシヤ出版、2001年 スペクターとキツセ (村上直之ほか訳) 『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて』、マルジュ社、1990年 上野千鶴子 『構築主義とは何か』、勁草書房、2001年</p> <p>【学習する上での留意点】</p>	<p>ここでは、フーコーの社会的受容、その端的なあらわれとしての構築主義に向けて、一種のクレーム申し立てが行われていると考えてもらってもさしつかえない。</p>
<p>8 . テ ー マ</p>	<p>人口減少 (高齢化と少子化のゆがみ)</p>

	<p>【学習の目標】 高齢化、少子化にともない、さまざまな社会病理現象が生じている。それらへの対策を講じるためにも、現状をしっかりと見据えなければならない。</p> <p>【学習の内容】 1) 高齢化の主原因は少子化であり、副次的な原因は高齢者の死亡率の低下である。 2) 「喪失」を手がかりに、高齢者の生活障害と生きがいの回復について学ぶ。 3) 人口減少という現象という問題に関して、他国と日本を比較し社会的に検討する。 4) 労働力不足を解決するには、少子化の解消だけでなく、女性、高齢者、外国人が仕事にアズセスできるシステムをつくる必要がある。 5) 少子化にともない、子どもに対する過保護が拡散しつつある。</p> <p>【キーワード】 年少人口、生産年齢人口、高齢人口、従属人口指数、合計特殊出生率、合計結婚出生率、未婚率、「喪失」：身体的、感覚的－認知的、社会的、経済的、個人的－情緒的、親の私化（プライベート化）</p> <p>【学習の課題】 1) 労働力不足を解決するもう1つの方法は「外国人労働者」の導入である。この言葉が象徴するように、本邦の移民政策は移民を guest worker としてのみ考えているとの批判がある。 2) 外国人労働者の立場や労働条件の劣悪さは、新たな社会病理現象を生み出している。 3) ピラミッド型の年齢人口分布が保てないことは、社会保障制度の崩壊を招くのではないか。</p> <p>【参考文献】 臨床精神医学増刊『高齢少子化時代の精神保健・医療』、国際医書出版、1998年</p> <p>【学習する上での留意点】 このテーマはマクロ社会の病理の代表であるが、同時にミクロ社会の病理をさまざまに散開させている当のものでもあることに留意されたい。</p>
9 . テ ー マ	移民に関する社会病理学的問題
	<p>【学習の目標】 移民という現象に関して、現代の日本におけるその特徴と社会病理学的問題について理解し、その問題についての対策、各自が思う多文化共存のありかたについて考える。</p> <p>【学習の内容】 移民の臨床においては二つの文化に属することとその葛藤が本質的で、不適応から精神障害を呈するレベルまで、精神医療では多文化間精神医学の分野で実践されてきた。多文化間精神医学の実践においては、異文化の理解と文化的逆転移の扱いが重要であり、母国での生活・移民し適応する過程・現在の生活の三段階を知ることが必要である。社会病理としては、移民の労働条件の悪さとメンタルヘルスの関係、一定の地域でのコミュニティの形成と同化の問題などがあるが、さらに移民の二世、三世の学校での不適応が教育分野で問題となっている。</p> <p>【キーワード】 二文化併存、二言語併存、同一性</p> <p>【学習の課題】 1. 外国人の多い地域を思い浮かべ、その長所と問題点を挙げてみる。 2. 日本でも、「多文化間精神医学」という学際的な学会が立ち上がっている。 3. 教育現場での不適応、言語習得の問題について考える。 4. 社会の国際化にともなう病理現象を緩和するには、どのような政策・施策が必要だろうか。 5. 自国の文化の保持と多文化共生について考えてみる。</p> <p>【参考文献】 大島一成、阿部又一郎著、『移民の子どものレジリアンス—その臨床的問題とフランスにおける治療システム、加藤 敏・編、レジリアンス、文化、創造』金原出版、2012年 宮島喬一編『移民の社会的統合と排除 問われるフランス的平等』初版、東京大学出版会、2009 梶田孝道著『統合と分裂のヨーロッパ—EC・国家・民族—』第一刷 岩波新書、岩波書店、1993 宮川裕章著『フランス現代史 隠された記憶—戦争のタブーを追跡する』初版、ちくま新書、2017</p> <p>【学習する上での留意点】カナダ多文化主義法 (Canadian Multiculturalism Act 1988) に基づくカナダの多文化主義、フランスの統合政策と移民政策などと対比して、日本の来たるべき多文化共生社会について考えてみよう。</p>
10 . テ ー マ	都市化と環境（自然）破壊
	<p>【学習の目標】 都市ではさまざまな社会病理現象が見られる。都市化と裏合わせの過疎化の社会病理についても一瞥する。これらを解決するための施策についても思いをこらす。</p> <p>【学習の内容】 1) 都市化（変化率）よりも、都市度（一定の水準）のほうが病理現象とよく相関する。 2) 都市の「匿名性」は、さまざまな社会病理をはぐくむ母胎であるといえる。 3) いわゆる「都会人」の社会的性格について、さまざまな意見を総合してみる。 4) 都市への人口集中がもたらした過疎化も深刻な社会病理をもたらしている。</p> <p>【キーワード】 都市化、都市度、人口の異質性、匿名性、インフォーマルな行動統制力の弱化、所得・地位・階層の分化、地域解体、スラム地区：大気汚染と地球の温暖化、廃棄物問題、水質汚濁、土壌汚染、生態系の破壊、騒音・振動</p> <p>【学習の課題】 1) 都市化の社会病理とからめて、環境（自然）破壊について認識を深めてみる。 2) これは循環的に人間の生活に障害をもたらすもので、早急な対策がせまられる。 3) 新聞やテレビで報道される事例について、具体的に論じてみる。 4) 現代社会学におけるトピック「リスク社会論」からも学ぶことができるだろう。</p> <p>【参考文献】 このテーマについては、教科書として掲げた星野周弘『社会病理学概論』が創意あふれる整序を行っている。 M. デランダ（篠原雅武訳）『社会の新たな哲学—集合体、潜在性、創発』人文書院、2015年</p> <p>【学習する上での留意点】 日本社会精神医学会では、統合失調症と「都市化」との関連がよく問題にされる。統合失調症の軽症化ないし多様化はすでに既成事実であるが、この問題を論じるとなるとなかなかむずかしい。</p>
11 . テ ー マ	家族病理その現象形態

	<p>【学習の目標】 ミクロ社会の病理の代表として、現代社会における「家族の危機」をとりあげる。親子関係のみならず、夫婦関係のそれにもいくつかの現代的形態がみられる。</p> <p>【学習の内容】 1) 家族病理現象は、家族の構造自体やその変化からも生じる。 2) 家族がもっていた「家族機能」には、本来、どのような事柄が属していたか。 3) 現代では、それらが大幅に減少し、他の機関に委ねられたりしている。 4) 家族の脆弱性は、家族成員の行動の統制を困難にするという問題を生み出す。</p> <p>【キーワード】 核家族化、単親家庭 (one person family)、留守家族、老人家族、直系家族 (stem family)、拡大家族 (extended family)、母子家庭、家族解体、貧困家庭、夫婦間コンフリクト、ドメスティック・ヴァイオレンス (DV)、「配偶者からの暴力及び被害者の保護に関する法律」(2001年)</p> <p>【学習の課題】 1) 離婚数が年々漸増しているが、夫婦間コンフリクトの増加の反映と考えられるが、それだけだろうか。自己愛の傷ついた他者の関心や理解の問題ではないだろうか。日本の離婚率の変化を他国と比べてみよう。 2) 夫婦間コンフリクトへの対処法として、どのようなことが考えられるか。また、離婚のポジティブな側面についても考えてみる。 3) ドメスティック・ヴァイオレンス生成の背景となる家族の特質をいくつか挙げてみる。 4) 家族はもはや「法の外部」ではなく、「法化対象」へと変貌している。</p> <p>【参考文献】 社会病理学講座第3巻 高橋正典ほか編『病める関係性—ミクロ社会の病理』、学文社 2004年</p> <p>【学習する上での留意点】 社会病理学的なものの考え方にはとらわれずに、改めて「自分にとって家族とは何であるのか」と問うてみよう。</p>
12. テーマ	<p>家族病理の根本問題、いじめと虐待</p> <p>【学習の目標】 家族の病理現象は、その成員にさまざまな病的行動をひき起こすことが多い。それらのうちの主なものをとりあげ、また、いくつかの精神疾患にも眼を配る。</p> <p>【学習の内容】 1) 非行という形態から蔓延するいじめに変わるに至った現代日本の社会病理の現象を記述してみる。 2) 年齢、学齢別にどういう非行、いじめの問題が生じるのか調べてみる。 3) いじめの問題と家族的特徴について、臨床心理学的に整理してみる。 4) 子どもの虐待の問題を精神病理、家族病理、社会病理から考えてみる。 5) 心中や近親者殺しは、「死」による家族緊張の解消であり、家族病理のもっとも悲惨な産物である。 6) 親と子供の心中の統計を調べてみる。</p> <p>【キーワード】 子どもの非行化、いじめ、離婚、自殺、家出と蒸発、心中、近親者殺し・嬰兒殺・不登校、ひきこもり、摂食障害 (eating disorder)、性同一性障害 (gender identity disorder)</p> <p>【学習の課題】 1) 家庭から学校へと眼を転じ、「不登校」という現代日本における重大な社会問題を取りあげる。 2) それとの関連で、いわゆる「ひきこもり」についても議論を展開してみる。 3) 家族療法的配慮が必要とされる「摂食障害」について、社会病理学的に検討してみる。 4) やや話がずれるが、「性同一性障害」をめぐる構築主義者たちの議論を批判してみよう。</p> <p>【参考文献】 社会病理学講座第3巻、高原正興ほか編『病める関係性—ミクロ社会の病理』、学文社、2004年 切池信夫『摂食障害—食べない、食べられない、食べたら止まらない』、医学書院、2000年</p> <p>【学習する上での留意点】 昨今、しきりと家族の命運を危ぶむ向きも多いが、家族こそ「最後に残るもの」という考え方も拡がりつつあるように思われる。</p>
13. テーマ	<p>現代日本における児童虐待の諸相</p> <p>【学習の目標】 2000年の「児童虐待の防止等に関する法律」の施行以降、世間の関心の高まりが反映したのか、児童相談所が処理する相談件数は増え続けているようである。社会構築主義者たちの主張も、この点に関してはあながち不当とは言えないかもしれない。</p> <p>【学習の内容】 1) 児童虐待が生じる要因については、実にさまざまなものが考えられるが、可能な限り挙げてみる。 2) 虐待の種類、被虐待児の年齢、虐待者の属性などのデータから、どのようなことがうかがえるか。 3) 社会構築主義者の言うとおり、児童虐待の絶対数は昔と比べてそれほどは変わっていないだろう。 4) しかし、児童虐待の発生メカニズムについては、決して昔と同じではないはずである。</p> <p>【キーワード】 身体的虐待、性的虐待、心理的虐待、ネグレクト、マルトリートメント、被虐待児の病態：外傷後ストレス障害 (PTSD)、愛着障害、非特異的な問題、注意欠陥多動性障害 (ADHD)、福祉的対応と司法的対応、通告義務、</p> <p>【学習の課題】 1) 虐待者の動機としてどんなものがあるのか、できるだけ最近のデータにあたって考えてみる。 2) 臨床心理士として、あるいは社会福祉士として、どのような介入がありうるか、いくつかの事例にあたってみる。 3) この問題に関する社会構築主義的アプローチについて、代表的な論文にあたってみる。 4) 背景要因としてベックのいう意味での「リスク社会」を想定し、このテーマについて考えてみる。</p> <p>【参考文献】 上野加代子著『〈児童虐待〉の構築』、世界思想社、2003年 井上真理子著『ファミリー・バイオレンス—子ども虐待発生のメカニズム』、晃洋書房、2005年</p> <p>【学習する上での留意点】 教員自身、精神科医として境界例や精神病の母親の養育放棄の事例を多く経験しており、児童相談所をはじめ多様な専門職との連携を図った経験がある。しかし、治療を求めてくる母親とニュースで報道される親からの残忍な虐待の事例とは異なるように思うが、その違いを精神病理学的、社会病理学的に考察する必要がある。臨床社会学という分野に学問的市民権を与えるうえでも、この問題をどのように考えるかが試金石になるといえるだろう。</p>
14. テーマ	<p>情報化社会の特質と病理</p>

<p>【学習の目標】</p> <p>【学習の内容】</p> <p>【キーワード】</p> <p>【学習の課題】</p> <p>【参考文献】</p> <p>【学習する上での留意点】</p>	<p>情報化社会の特質自体および情報化にともなう人々の生活の変化は、それぞれに新たな社会病理現象を生み出しているといえる。ここでは、マクロなパースペクティブからいくつかの問題をとり出してみる。</p> <p>1) 情報化社会では、情報や知識の陳腐化が激しいスピードで進行する。</p> <p>2) 情報量の増大に比例し、人々の情報選択の自由度が大幅に増大する。</p> <p>3) 情報の多元性、流動性は、価値観、規範、行動様式などの多元化、ファッション化をもたらす。</p> <p>4) 本能的・実用的欲求から感覚的・情動的欲求への変化が増進する。</p> <p>情報化、実用的（非選択的）機能、情動的（選択的）機能、情報のスクラップ・アンド・ビルト、マスコミ情報、映像的・視覚的メディア、擬似環境、仮想現実（ヴァーチャル・リアリティ）、情報の管理・統制、受け手の先有傾向（pre-disposition）</p> <p>1) 犯罪的、暴力的、性的情報内容の氾濫は、子どもたちにどのような影響を与えるか。</p> <p>2) マスコミによる擬似環境は、人々に感覚的な思考と理解、感覚的な反応のしかたを植えつける。</p> <p>3) マスコミ情報への接触量の大きさは、子どもたちにどのような影響を与えるか。</p> <p>4) 情報化によるプライバシー侵害の恐れに対しては、どのような施策が必要だろうか。</p> <p>ノルベルト・ボルツ（山本 尤厄訳）『仮象小史—古代からコンピューター時代まで』、法政大学出版社、1999年</p> <p>ノルベルト・ボルツ（識名章喜葉）『グーテンベルグ銀河系の終焉—新しいコミュニケーションのすがた』 法政大学出版社、1999年</p> <p>大黒岳彦著『情報社会の〈哲学〉—グーグル・ビッグデータ・人口知能』勁草書房、2016年</p> <p>現代人の「活字ばなれ」について、マクロなパースペクティブに立って、社会病理学的な考察を展開してみよう。例えば、「映像の前景化と文字の背景化」と定式化した場合、はたしてどれほどの妥当性をもつだろうか。</p>
<p>15. テーマ</p>	<p>精神医療とフーコーの生-権力論</p>
<p>【学習の目標】</p> <p>【学習の内容】</p> <p>【キーワード】</p> <p>【学習の課題】</p> <p>【参考文献】</p> <p>【学習する上での留意点】</p>	<p>心理職にとっても福祉職にとっても、精神医療をマクロ-ミクロリンクの視点から相対化してみることは重要な意義をもつ。なぜなら、その国の文化度を測る尺度として、精神医療こそがもっとも鋭敏なセンサーとして働くからである。</p> <p>1) フーコーは「死なせるか、生きるままにしておく」という「古い法／権利」から説き起こしている。</p> <p>2) ここでは、生は「不作為 (laisser)」の結果として、死は「作為 (faire)」の結果としてもたらされる。</p> <p>3) フーコーによれば、生-権力は「生きさせるか、死の中へ廃棄するという権力」として定義される。</p> <p>4) ここでは、生が「作為 (介入)」の結果として、死が「不作為 (不介入)」の結果として現出する。</p> <p>生-権力 (バイオ-パワー)、生政治、人口、統治性、新自由主義 (ネオリベラリズム)、セキュリティの装置、リスク管理、「経済人 (ホモ・エコノミクス)」、環境犯罪学、人種主義、ホロコースト、安楽死計画、医療観察法、自立支援法</p> <p>1) なぜ人びとを「生きさせる」はずのものが人びとを「死の中へ廃棄する」ことになると言えるのだろうか。</p> <p>2) この矛盾を解消するために、フーコーは「人種主義」というメカニズムに注目している。</p> <p>3) 第一次大戦とナチズムの時代、精神病者の大量餓死が生じたという事実を歴史的に検証してみる。</p> <p>4) この極端な事例は、どのようなロジックのもとで、医療観察法と自立支援法以降の日本の精神医療にも投影可能になるか。</p> <p>市野川孝孝：生-権力論再論—餓死という殺害。現代思想 35 卷 11 号、78—99、2007 年</p> <p>M.フーコー（慎改康之訳）『生政治の誕生』、筑摩書房、2008 年</p> <p>各国の精神医療の原点について調べてみよう。社会学者の研究も多くみられる。</p>